
【固い覚悟と小さな願い、そして、叶えてはならない夢】

胡蝶愛生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【固い覚悟と小さな願い、そして、叶えてはならない夢】

【Nコード】

N9772M

【作者名】

胡蝶愛生

【あらすじ】

人造人間たちとの激闘を終えてから早数年。会議のために中央へと来たマスタングとホークアイは大總統のグラマンに挨拶するため、彼のところへと訪れる。目的は挨拶だけだったはずなのに、気付けば話が思わぬ方向へ。祖父としてのささやかな願いが、彼たちを深く苦しめる。それは、彼たちが叶えてはならない夢、しかし、完全に捨てることも出来ない夢。苦悩の末、彼たちが下した結果は？

(前書き)

最終回の内容及び捏造要素が御座います。

また、パーフェクトガイドブック2に記載されている、ホークア
イトグラマンの血縁関係を前提としております。

大總統としての威厳を感じさせない狸のような笑顔に出迎えられたとき、嫌な予感がした。

そして、その嫌な予感は早くも一分後に見事的中した。

「そう言えばマスタングくん、きみ今年で幾つだっけ？」

「……三十五になります」

簡単な挨拶もそこそこに突然年齢を尋ねてきた大總統閣下は、彼は訝しげな視線を送りながらも淡淡と答える。普段の彼なら視線にすら感情を乗せぬのだが、この大總統閣下にとぼけ顔が通用しないためから、最早取り繕うとしてもしていない。

それは彼の半歩後ろに控える彼女も同じだった。現に、先の質問が出てきた瞬間から彼女の眉間にはしわが寄っている。ちなみに彼女が機嫌を悪くした理由は、この後すぐに会議が入っているためである。要するに、時間がない。

にも関わらず、彼の答えを聞いた大總統閣下はそのまま彼女へと振り向き、機嫌の悪い彼女の顔を下からのぞき込んだ。

「リザは？」

名前で呼ばれた瞬間、腰の拳銃に思わず手が行った。真面目な彼女は、職務中に名前を呼ばれることを頑なに拒んでいた。特に、祖父である大總統閣下と上司である彼に呼ばれることにはかなり。

だから質問に答えることなく、大總統閣下を鋭い眼光でにらみ付けながら口を開いた。

「職務中に名前を呼ぶのは止めて頂きたい、と以前から申し上げて

るはずですが、グラマン大總統閣下」

不機嫌だと言うことも重なりかなり冷たい声で忠告するのだが、残念なことに大總統閣下の顔に反省の色は見えない。実を言うと彼女の方も、大衆の面前で呼ばないだけ増しか、と大変悔しく思いながらも少し諦めているのが。

「うん、そうだね。で、きみは幾つ？」

案の定彼女の忠告を軽く受け流した大總統閣下は、反省することなく再度問う。その質問の意味を図りかねながらも、彼女は正直に自分の年齢を答えた。

「……三十です」

答えた直後、大總統閣下の表情が変わった。東方司令部の司令官だったときから変わらない、何かを企んでいるときに浮かべる怪しい表情。それを見た瞬間、彼たちはすぐに退室しなかったことを心から後悔した。今までの経験から、このまま付き合おうと碌なことが起きないからだ。今からでも間に合うか、と一瞬考えたが大總統閣下が発する空気がそれを許さない。

退室する機会が完全に失われた彼たちは、このとき会議を半分ほど諦め、この後大總統閣下が言うことを察した。

その矢先、大總統閣下が言う。傍らの彼がデートの相手に向ける笑顔以上に胡散臭い笑顔で。

「だよねえ。そうだよねえ。良い年だよねえ。だからさ、二人とも好い加減に結婚す」

「する気は御座いません」

彼女と彼の否定の声が、予想していた通りの大總統閣下の言葉をぴしゃりと遮った。言葉を遮られることを想像していなかった大總統閣下は首を傾げ、「即答なの？」と態とらしいほどに悲しげな声で問う。年齢に似合わぬ声音に、彼は頬を引きつらせ、彼女の眉根には先ほど以上にしわが寄る。その彼女たちのあからさまな態度を気にすることも無く、大總統閣下は不平不満を零し続けるが、彼女よりも先に完全に機嫌を損ねた彼によって閉ざされる。

「恐れ入りますが、わたしも彼女もそのような意思は全く御座いませんので」

余りにも質の悪い話にこれ以上付き合っていられない、とでも思ったのか、啞然とする大總統閣下に敬礼し、彼はさっさと身を翻す。彼の一方的な態度に、思わず注意の言葉が彼女の喉から出掛かったが、結局は何も言わなかった。何も機嫌を悪くしたのは彼だけではない。彼女もなのだ。大總統閣下の手前、声を荒げなかっただけでも良しとするか、と思い彼女も敬礼し、取っ手に手を置いた彼を追う。

しかし、大總統閣下は彼たちの退室を認めなかった。

最後に、と振り返った彼たちの視界に、先のふざけた笑顔ではなく、真面目な面を浮かべる大總統閣下が映る。そして、髭で隠された口から、真剣さを帯びた声が発せられる。

「……もしかなくとも、イシユヴァールとかが原因？」

大總統閣下の変貌振りとその内容に、扉の前で立ち止まっていた彼たちは、同時に体を強張らせた。奇襲に成功したことで彼たちの反応に満足したのか、大總統閣下の髭の下が少し動いた。恐らくは唇の端をわずかにつり上げたのだろう。見えないからはっきりとは言えないが。

これ見よがしに盛大に吐かれる大總統閣下のため息に、彼たちの肩がぴくりと跳ね上がる。

「やあっぱり。大方、罪を犯した自分たちが幸せになってはいけない、みたいなこと考えてるんでしょう君たち。それから、上司とその副官が結婚した場合の世間体、とか」

「……………」

「沈黙は肯定として受け取っとくよ」

「……閣下の仰る通りです」

聞かされた内容が図星であることに観念したのか、傍らの彼は渋滞ながら肯定を示した。そして、そのまま彼は顔を下に向けてしまう。その彼へと、大總統閣下は歩み寄る。

顔を上げない彼の目の前で立ち止まった大總統閣下は、彼を次いで彼女の顔を先ほどと同じようにのぞき込み、口を挟む暇もなく言葉の通りに打ち明ける。

「この際だから言っちゃうけど、きみたちの関係なんて今更でしょう。これだけ長く一緒にいてきみたちの間に何もないって思う人間なんて誰もいやしないよ。よって、後者の方は全く問題なし」

「いや、あの」

「で、問題は前者の方だね。こればかりは儂にはどうにも出来ないよう本当」

「ですから結婚する意味は」

「本当にないって言うの？ 嘘でしょう。と言うかきみたちのそれは刷り込みだよ。罪の無い人間を殺してきた自分たちは、いつかその罰を受ける。幸せにならないで、それを遠ざけるのも自分たちに与えられた罰の一つ。だから、愛する人と結婚し家庭を築くことなんか出来ない、みたいな。その考えが固定されてない？」

それはそれは鋭い大總統閣下のご指摘に、彼たちは口を閉ざす。それでも隣の彼は、暗い表情でかぶりを振り大總統閣下の指摘を否定する。

「確かに。ですが、一般的に考えればそうなるのでは」

「ま、一般的に考えればね」

同調するような大總統閣下の返答に思わず安堵した彼だが、「けど」と続けられたため耳を傾ける。そして、目を見開いてその内容に驚愕する。

「けど、一般的な生活をしてないわしらがそこだけを一般的に考えちゃいかんでしょう」

「！」

「今のうちに言っとくけど、きみたちには将来ちゃんとした罰を受けてもらうよ。それはきみたちも覚悟してることでしょ？ けど、今はそのときじゃない。だって、マスタングくんには今やらなきゃならんことがちゃんとあるでしょうが」

驚愕により思考が停止した脳を回転させ、大總統閣下が指しているやらなくてはならないことの意味に気付く。それは、彼が全力で取り掛かっているイシュヴァール政策以外他にないだろう。火を見るよりも明らかだ。

聡明な彼もそのことを瞬時に理解し、しかし飽く迄も大總統閣下の言い分を否定する言葉を重ね続ける。

「はい。ですが、今までの所業を考えるとそれは当然のことです。わたしは今の政策に尽力で取り掛かってる積もりです。勿論、それが償いになるとは微塵も思ってはおりません。しかるべき制裁は受けるべきです」

頑として変わらない彼たちの姿勢に、流石の大總統閣下にも諦め
の様子が出てきた。くしゃりとゆがめられた表情が、どこことなく寂
しそうに見えるのも恐らくは気の所為ではない。声の調子も、最初
と比べれば下がってきている。

そのような様子の大總統閣下を見、そろそろ切り上げるべきか、
と彼たちが思ったとき、当人が心底不機嫌そうに彼を見上げた。そ
のときに、不機嫌なのはこちらのほうだ、と言う彼の心のつぶやき
が聞こえたような気がした。

「マスタングくん。きみ、わしの言葉理解してないでしょう」

前触れ無く言われた内容の意味を理解出来ない感じの彼は、咄嗟
に取り繕った返事をする。

「いえ。そのようなことは決して」

しかし、彼の返事は少しばかり大きい大總統閣下の声により途中
で切られる。

「いいや分かってない。わし、ちゃんと言ったよね？ 罰を受ける
のは今じゃない、て」

「……？ ——！」

強調された最後の部分の意味を瞬時に吟味した彼たちは心の底か
ら絶句した。それは屁理屈で御座いましょう、からかうのも好い加
減にして頂きたい、などと返す余裕もその一言で綺麗に吹き飛んだ。

大總統と言う仮面を取り外した大總統閣下は、自分を凝視する彼
女の手を取り、穏やかに微笑む。その笑みを見た瞬間、東の田舎で
暮らす少女とその祖母の顔が、彼女の脳裏に映し出された。思い出

されるのは、先日仕事の合間を縫って彼と様子を伺いに行った際に、少女の祖母が少女の将来と少女の身を案じたときに浮かべた困ったような笑み。そして、東西の国へ旅立った兄弟が帰還することを知り、今か今かと待ち焦がれている少女の笑顔。そして、本当に大切なものたちへと向けられる深い愛情が込められた笑み。その笑いとまさに同じ笑みを今、彼女の祖父は彼女へ向けている。執務中に私事を挟むことを強固として禁じ、私情でも余り交流することが出来なかった祖父のそのような笑みを初めて見せられた彼女は暫し狼狽する。その孫娘を思う祖父の穏やかな声が、彼女の耳を打つ。

「ここからはわしの個人的な意見なんだけどねえ、やっぱりどうしても見たいわけなんだよ」

「……閣下？」

「大切な孫娘が幸せに笑って暮らしてるところを、さ」

呟かれた祖父のささやかな望みに、冷静沈着と言われる彼女の目頭が知らずに熱くなり、ぐ、と言葉を詰まらせる。二人の様子を見ていた彼も、大総統閣下の祖父としての温かい言葉に表情を崩す。

泣き出しそうな顔を見られたくないため、黙ってうつむく彼女を見つめてから大総統閣下は彼へと振り返る。

「きみも分かっているでしょう？ わしの可愛い可愛い孫娘を、リザを幸せに出来るのは、きみだけなんだよ、マスタングくん。わしのためにもきみのためにも、何よりリザのためにも、老い先短いこの爺の詰まらない望みを聞いてくれないかな」

「……………」

「マスタングくん、リザ」

彼が、手袋をはめていない手をきつく握り締めるのを、薄らとぼやけた視界で見た。恐らく苦渋に満ちた表情を浮かべていることだ

ろう。

余り手入れをしていないにも関わらず美しい形を描く睫毛を伏せ、彼女は思う。

大總統閣下の言葉の数数は、予想外の盲点ばかりだったが悔しいことにそれはすべて正しい。イシユヴァール殲滅戦のことを負い目に感じていることも、それを理由に恋人と言うこの関係を互いに手放しで受け入れられていないことも、……それでも離れることが、離すことが出来ないことも、大總統閣下にはすべてお見通しなのだろう。大總統閣下が言う通り、彼女を幸せに出来るのは彼だけしかないし、逆もまた然り。その自信は確かにある。確信、と言っても良い。しかし、だからこそ結婚は出来ない。愛する人の傍らで、愛する人とともに生きることが出来る。それだけでも罪を背負う彼たちには過ぎた幸せだと言うのに、幸せの象徴である結婚を受け入れてしまえば、それこそかの地で殺した人人へ対する冒瀆でしかない。幸せになれるはずだった人人の命を奪った彼たちが心から幸せになることを、かの地で死んだ人たちが許してくれるはずがない。何より、彼たちが納得しない。その考えが、祖父である大總統閣下を深く悲しませることになるのだとしても。

「……んでは」

隣の彼から聞こえてきた小さな声に、彼女は思案に沈むことを止めた。顔を上げると、心から申し訳なさそうな表情を浮かべた彼が、大總統閣下を正面から見据えていた。聞き取れなかったことに首を傾げる大總統閣下に、彼は互いに唯一納得する妥協案を挙げる。

「事実婚、では駄目でしょうか？」

彼の妥協案に大總統閣下が目を丸くする。問いかける声が、僅かに上ずる。

「それって、籍入れないってこと？」

「はい。住居も一緒にはしません。姓も変えません。子どもも可能な限り作りません。ただ、夫婦に準ずる関係である、と。それではいけませんでしょうか？」

「それ、本気？」

「閣下を喜ばせて差し上げたいのは山山なのですが、結婚だけは承服致しかねます。何より、我々が納得出来ません。リザ、きみもそうだろう？」

味方を増やそうと思ったのか、彼女に肯定を求めるため、彼は振り返る。と同時に彼女も首肯で彼の考えに同意することを示す。

「本当に結婚しないの？ この先一生」

「この意思が変わらない間は」

覆す気の無い彼の確固とした返事に、いよいよ大總統閣下も諦めてくれたようだ。祖父としては悲しい現実なのかも知れないが、それでも彼たちの本気が通じたのは正直うれしい。うれしいのだが。

「……そう。それが、きみたちの最大限の譲歩なのね」

「……………」

項垂れた頭に、気落ちした声音。大總統閣下の態度に、彼たちはどのように反応すれば良いのか分からない。そもそも、返事をする資格があるのか、とすら思えてきた。彼たちの覚悟で、孫思いの老人を傷つけてしまったのは事実なのだから。

しかし、ある意味で残念なことにそれは杞憂だったようだ。

大總統閣下は突然がば、と顔を上げると、目を嫌らしく光らせ普段と同じ調子で話し掛ける。その様に、彼たちは若干腰を引く。

「そっかあ。そうだよねえ。ここで意思曲げちゃきみたちじゃないもんねえ。爺としては少し寂しいけど仕方がないよねえ、うん。だからさ、せめて写真くらい撮っとかない？」

「は？」

「写真、ですか？」

復活した様子の大總統閣下の突然の提案に、彼たちは意図が分からず口をあんぐり開ける。しかし、完全に復活した大總統閣下は全く気にすることなくにこにこ話し続ける。

「そう、写真。何も出来ないなら、せめて写真取っとこうよ。勿論リザちゃんの花嫁衣装で。まさか、古い先短い爺の小さな我が儘を断ったりしないよね？　するんだったら、大總統命令で降格しちゃうよ？」

大總統の特権を振りかざし脅迫してくる大總統閣下。恐ろしいほどに上機嫌の大總統閣下に勝てる見込みがないことを悟った彼は、せめてものに小さな反撃を付け足しそれを受け入れる。その顔に浮かぶのは、心底面倒臭そうな清しいほどに嫌嫌とした彼らしい胡散臭い笑顔。

「はあ、分かりました。但し、イシユヴァールに関する案件がある程度片付き、情勢が安定してからでお願いします」

「それ、何年後？」

大總統閣下の問いをさらりと無視し、彼は敬礼すると取っ手に手を掛け今度こそ退室する。

「さて、これから会議が御座いますので我我はこれにて失礼致します

す。行くぞ、リザ」

「え、わしの質問無視？」

「では閣下。失礼致しました」

「ちよつとマスタングくん！」

ぱたり、と扉は静かに閉められた。

――――

会議室へ向かう途中、彼はぼつりと呟いた。斜め後ろを歩く彼女には決して聞こえないように。

「わたしが大総統となり裁きを受け、それでももしも我我が生きてれば、そのときこそは……」

――鋼の名を持つ元国家錬金術師とその弟が帰還したと連絡が入ったのは、それから一か月後のこと。

（後書き）

ここまでお読み頂き、有り難う御座います。

わたし個人としては、彼たちには結婚して幸せな家庭を築いても
らいたかったのですが、最終回の内容からして、その展開は難しい
と思いました。

結婚と言う幸せを手放した彼たちは、では次にどうするか。

そこで、無い頭を必死に振り絞って考えたのが上記のような内容
でした。

主題はそのまま、マスタングとホークアイの結婚に対する意識、
です。

では、これにて失礼させて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9772m/>

【固い覚悟と小さな願い、そして、叶えてはならない夢】

2011年10月5日21時50分発行